

ガリシア語における「条件法」の用法

O emprego do futuro do pretérito de indicativo en galego

浅香 武和

Takekazu ASAKA

0. はじめに

ロマンス諸語のなかで、ガリシア語にのみ使われている「条件法」の用法がある。例えば、

-Tén boas patacas, tiu Pedro. 「ペドロおじさん、いいジャガイモある?」

-Tería.

Tería は、一般に「あるだろう」と言うような推測の意味に捉えられがちであるが、ガリシア語では話し手の言ったことに強く否定して皮肉的に「あればいいんだが、あるわけないだろう」という意味で使われる。本稿は、この「皮肉的用法」と呼ぶ特徴がどの様に使われているか考察する。

1. 呼称

「条件法」の呼び方に、Futuro do Pretérito de Indicativo, Futuro Hipotético de Indicativo, Pospretérito, Condicional, Potencial, Futuro II など、文法学者により様々な名称が存在するが、Real Academia Galega に従うと、Futuro do Pretérito de Indicativoが一般的である。

ガリシア語の最初の文法書を著した Mirás(1864)、及び Saco e Arce(1868)、Marcial Valladares(1892)、Lugrís Freire(1931) は接続法不完了過去の第II形式としている。Couceiro Freijomil(1935)は Modo potencial 「可能法」、Carre Alvarellos(1967)は Modo condicional 「条件法」である。

1. 1 形態

1) ガリシア語の「条件法」の形態を Normativo Oficialに従い示すと以下のようである。

P1	cantaría
P2	cantarías
P3	cantaría
P4	cantariamos
P5	cantariades
P6	cantaría

[注] ガリシア語には複合時制は存在しない。

Atlas Lingüístico Galego, Vol. I(1990)『ガリシア言語地図』を見ると P4 に cantariamos / cantaríanos の形式、P5 に cantariades / cantariandes / cantaríais / cantariais の形式も確認できる。

2) 口語ガリシア語で条件法の形成には迂言形式として、二つのケースがある。

・había (haberの直説法不完了過去) + 不定詞 = había cantar

・ía (irの直説法不完了過去) + 不定詞 = ía cantar

※ ía の代わりにカスティージャ語の影響を受けた iba の形態も方言で使われている。

{viria }

[例1] Dixo que non {ía vir } ata mañá.

{había vir }

「明日まで帰らないだろう、と彼は言った。」

迂言形式 *había vir* には義務的な意味もあり、次の二つの例文から義務と可能性の対立を示すことができる。

[例2] Dixo qu'ol acabaríase en menos dun día.

「少なくともそれを一日で終わらすべきだろう、と彼は言った。」

[例3] Parecélle qu'ol acabaríase en menos dun día.

「少なくともそれを一日で終えるだろう、と彼には思えた。」

2. 「条件法」の用法

1) 過去未来としての働き

主節の動詞が過去で、その過去からみて未来の事柄を従節で表す場合。一般に間接話法の中で使われる。

[例4] Dixo que viría por aquí despois das feiras.

「お祭りが終わってからここに来る、と彼は言った。」

条件法の形式 *viría* に代わって、直説法不完了過去 *viña*、または迂言形式 *ía vir* が同じ意味で使われる。

2) 仮説未来としての働きを、次のように a) b) c) と分類する。

a) 過去における仮説(蓋然性・可能性・推測・疑惑)を表す場合。主節に用いられる。

[例5] *Moi cerquiña da casa. ¿Que... qu' habería? Eu non sei, pero habería...*

habería quiñentos metros. (ルーゴ・チャ地方での調査結果)

「家からとっても近く。どのくらいあったろうか... ? そうだな、俺は知らないけど、500メートル位だったろう。」

この用法は、文頭に疑いの副詞 *quizais*(又は *poída que*)を置くことにより、それぞれ次のように代替することができる。

Quizais houbera quiñentos metros. (接続法不完了過去)

Quizais había quiñentos metros. (直説法不完了過去)

[例6] *-¿A que veu onte por aquí foi Maruxa? -Sería.*

「昨日ここに来た女の子はマルシャだったかな?」「そうだったかもしれない。」

b) 仮定を含む条件文の帰結節に用いられる。

[例7] 過去 *Valeríache máis se te quedaras na casa daquela.*

「その時、君は家にいたならば、もっと役に立ったのだが。」

[例8] 現在 *Valeríache máis se te quedaras na casa agora.*

「今、君は家にいれば、もっと役に立つでしょう。」

[例9] 未来 *Valeríache máis se te quedaras na casa se ves que ameaza chover.*

「雨が降りそうなのが分かれば、君は家にいると もっと役に立つだろうが。」

c) 相手を中心にした疑問文で丁寧な依頼・婉曲的な懇願表現

【例10】 ¿Importaría explicarme o que teño que facer?

「私がすべきことを説明していただけますか。」

【例11】 ¿Poderíasme dar lume?

「火を貸していただけますか。」

【例12】 Quereríalle pedir un favor.

「あなたにお願いがあるのですが。」

【例13】 Habería que rematar isto unha vez.

「一度これを終わらすべきでしょう。」

3) 皮肉的用法

話し手の質問や発言にたいして、否定的な答えである場合、non...を使わずに話し手の用いた動詞を繰り返して、条件法の形式で答える言い方である。この用法は、他のロマンス諸語とは趣を異にする興味ある事実であり、ガリシア語にしか見られない現象である。とくに会話において頻繁に使われている。

ここでは、こうした用法のいくつかを挙げてそれぞれのケースを考えてみる。

【例14】 -¿Convidoute? 「君は招待されたのかい？」

-Convidaría, como é tan espléndido.

「彼は気前がいいから、招いてくれるだろうよ！」

この返答は、実際は Non me convidou. 「おれは招待されなかった」と否定構文で答えるべきところ、convidaríaと条件法の形式を用いている。表面的なレベルでは肯定的な答えであるが、そこには、内心「招待されなかったんだ」ということを条件法の形式を用いて婉曲的に表現している。

【例15】 -Amañárono moi ben. 「彼らはとてもうまくそれを修理したよ。」

-iAmañarían! 「修理できたの！」

「修理できたの！」という応答には、とても強い疑惑の念をもっている。これからは「そんなことするにはおよばないよ！」 iSó faltaría que non o fixesen! という振る舞いと共通したものが認められると思う。

【例16】 -Compráronlle un coche. 「車を買ってもらったんだって。」

-iCompraría! 「買ってくれればいいんだが！」

「買ってくれればいいんだが！」には、Non mo compraron. 「買ってくれなかったよ」、もしくは、「買ってくれるわけがないだろうよ」という皮肉の意味がこめられている。

【例17】 -Seica lle tocou a lotería ós Patexos. 「パテソ一家に宝くじが当たったようだね。」

-Tocaría, ¿non lles había tocar? 「当たればいいんだが、当たらないだろうか？」

この返事には、相手の発言を丁寧に否定するような「いいえ、とんでもありません」、もしくは「当たればいいが、当たるとは思いませんよ」という意味を含んでいる。

【例18】 -Seica lle deron unha casa na Coruña. 「コールニャの家もらったようだね。」

-Si, home, darían, ¿non ían dar? 「え、誂、くれればいいんだが、くれないだろうか。」

この返事には、iQue ían dar! 「くれればいいんだがなあ、どうしてくれるものか!」という意味がある。

【例19】 -Souperon ben o que facían. 「彼らはやっていることをよく分かったかな?」

-Saberían. 「さあ、どうだろうか?」(疑惑・不安を示している)

この例文は、ルーゴ・スワルナ方言(Lugo: Suarna)で、souperon方言形 = souberon である。この場合は、iQue ían saber! 「分かればいいんだがなあ!」という意味が込められている。

これまで見てきた例文はカスティーリャ語で ¿Te gusta estudiar? 「勉強すきかい?」にたいする返答 -iQué va! 「とんでもない」に相当すると思われる。さらに、カルロス・ルビオ、秋山紀一著『はじめてのスペイン語』(1989,岩波書店) p.224 には ¿Quieres venirse con nosotros? -Me gustaría, pero tengo mucho trabajo. 「私たちと一緒に来ませんか?」 「行きたいんですけど、仕事がたくさんあるので行けません」というように、条件法には申し出を丁寧に断るときに使われるという説明から、ガリシア語と一部共通したところもある。

4) ガリシア語における特異な表現

上に述べた皮肉的な答え方のなかには、ルーゴ・スワルナ方言にのみ見られる特異な表現形式がある。dar, decir, saber, ter, ver などの動詞の「条件法」の形態に接尾辞 -ola が付加される言語事実である。

【例20】 -Daríalle muito polo xato. -Dariola. [daría+ola]

「彼は子牛に夢中のようだ。」 「夢中なわけないよ。」

Dariolaには、iQue me ían dar! 「夢中になってくれればいいんだが!」という深層の構造が考えられる。直截 Non me deron. 「夢中じゃなかった」と否定文の形式で答えるより心理的に隔たりを示す丁寧な言い方と思われる。

【例21】 -Usté saberá quen foi. -Saberiola. [sabería+ola]

「あなたは自分が誰だったのか分かるだろう。」 「分かるわけないだろう。」

Saberiolaには、iQue vou saber! 「分かればいいんだが!」という意味を言外に含んでいる。

【例22】 -Tén boas patacas, tiu Pedro. -Teriola. [tería+ola]

「ペドロおじさん、いいジャガイモある?」 「あるわけないよ。」

Teriola は iQue vou ter! 「あるといいんだがなあ!」に等しく、実際は持っていないことを示している。

【例23】 -Veulle un tiu mui rico d'America. -Viriola. [viría+ola]

「南米からとっても金持ちのおじさんが来たんだって!」 「来るわけないよ。」

Viriola は iQue ía vir! 「来ればいいんだがなあ!」という願望を表しているが、現実には来ていないことを示している。

この答え方がどこから生まれたのか、不明であるが、ガリシア語の縮小辞には軽蔑辞として否定の意味で使われると、Rosario Álvarez et al., *Gramática galega*. p.89に記されていることから条件法の動詞形態に接辞 *-olac* が付いて、この型の答え方が生まれたのかもしれない。

この特異な形式について、川上茂信氏（東京外国語大学）から Emilio Nández Fernández(1973), *El diminutivo*. Madrid, Gredos. p.37にガリシアでは「動詞定形+縮小辞」の例があることをご教示いただいた。 ¡Queríñote muito! [quero+iño+te]

また、ガリシアと隣接するアストゥリエス地方のバブレ語(アストゥリエス語) にこの現象があることを、1993年の夏に筆者は知ることができた。J.L. García Arias et al.(1976), *Gramática bable*. p.53 注(6)に、バブレ語では発言された内容にたいして懐疑的態度を表すために *darióla*, *llegarióla*, *vendrióla*, *escucharióla*, *comerióla*, *entenderióla*, *anoxarióla*, *correrióla* などの言い回しが使われると記されている。ということは、ガリシア語のスワルナ方言に見られる特異な形式はバブレ語の影響によるものかもしれない。

口頭発表の後、原誠先生（東京外国語大学）からガリシア語の *dariola*, *saberiola*, *teriola*, *viriola* のアクセントの位置について質問をいただき、筆者は1993年夏に Instituto da Lingua Galegaにおいて方言調査の録音結果を Antón Santamarina氏と確認したところ、*darióla* のようにいずれも[ó] にアクセントがくることが判明した。あらためて原先生にお答えします。

まとめ

ガリシア語には、話し手の質問や発言にたいする答え方に「条件法」の形式を用いて否定的な意味を表す言い方がある。この用法は婉曲的な表現をもとにして発展したものと考えられる。ただ婉曲的な用法と異なる点は、皮肉的用法のほうが事実を遠回しに強調させることである。

ところで Gili Gaya, *Sintaxis*. § 129 によると、遠回しな言い方は丁寧な表現ともなり、また皮肉的な言い方にもなる、と記されている *Deberías trabajar*. 「働いたらいいんだかねえ」。

そして、このような遠回しの言い方はガリシア語では、肯定的な返答→否定的な意味を表すことにつながる。

-Tén boas patacas, tiu Pedro.

-Tería. (⇒ Non teño nada.)

Referencias

- Álvarez, Rosario/ Regueira, X.L./ Monteagudo, H.(1986) *Gramática galega*. Vigo, Galaxia.
Fernández Rei, F.(1989) *Dialectoloxía da lingua galega*. Vigo, Xerais.
García Arias, J.L.(1976) *Gramática bable*. Uvieu, Naranco.
Gili Gaya, S.(1982) *Curso superior de sintaxis española*. Barcelona, 14ª edición.
Regueira Fernández, X.L.(1989) *A fala do norte da Terra Cha*. Universidade de Santiago.
Santamarina, Antón (1974) *El verbo gallego*. Verba Anejo 4. Universidade de Santiago.
Veiga, Alexandre (1986) "Verbo latino e verbo galego", *Verba* 13. pp.75-125.
浅香 武和(1993)『現代ガリシア語文法』東京, 大学書林.
池上 孝夫(1987)「否定」『ポルトガル語文法の諸相』東京, 大学書林.